Tokyo Metropolitan Archaeological Center

たまのよこやま

縄文の村は、草花の魅力もたくさん

東京都埋蔵文化財センター報 85

縄文ワクワク体

さて、５月３日と４日。縄文の村にいつもとは違うにぎやかな２日間が帰ってきました。

ちょうど１年前、多摩センターこどもまつりにあわせ、センター創立 30 周年記念事業として行われたこの行事。縄文ワクワク体験まつりの第２回目が開催されたのです。

「クルミ、おひとつ割っていかれませんか？」

１年前は初めての試みという事で、どうなるか不安を抱えながら無我夢中のなかで、あっという間の２日間でしたが、結果は上々。終わり良ければすべてよし、という訳ではありませんが、たくさんの参加者に喜んでいただけた、と自負しております。ただ今回は、前回を越せるのか、という新たな不安を抱えながら、反面、内心闘志を燃やしながらのスタートでした。

メニューは前回とほぼ一緒です。縄文の村の入口に受付を配置。通貨代わりのドングリ６個が入った袋と、銅鐸（どうたく）の形をしたスタンプラリーシートを受け取ります。

並んで待った甲斐あり！

体験は１回につき１ドングリ。縄文の村に入るとすぐに、「クルミ割り体験」。普段はやらない、できない体験がすぐ目の前に。ここで使っているクルミ。実は縄文の村産なのです。これぞまさに、地産地消ですよね。

奥へ進むと、復元住居Ｂ棟の周（まわ）りがメインの会場になっています。縄文コレクション、勾玉作り体験、石器作り実演見学、火おこし体験とワクワクメニューが目白押し。中でも皆さんのお目当ては、やはり勾玉作りですよね。「前回できなかったから・・・」と、開場早々に並ぶ参加者の方々も見受けられました。きっと素敵な勾玉が出来上がったことと思います。そして、今回、残念ながら出来なかった皆様、ごめんなさい。これに懲りず、来年チャレンジして下さい。お願いします。

森ガール、山ガールの次は縄文ガールで決まり！

勾玉作りのコーナーがいっぱいになり、参加者があふれてくると、その流れは火おこし体験が、ドーンと引き受けます。前回の経験から、スタッフを増員して一人でも多くの参加者に体験していただきたく、がんばっちゃいました。

昔から「火のない所に煙は立たず」って言いますよね。でも、火おこし体験のコーナーではその諺（ことわざ）は通用しないんです。事実、あちこちで煙が出て、もうモクモクです。煙で涙が止まらない人や咳き込んでしまった人、それぞれに様々でしたが、炎が上がると一様に、驚きと感動の笑顔でした。ありがとうございました。

こうして、こうやって、こうやると、ほら･･･。

藤棚の下では、今年も縄文コレクションです。略して「縄コレ」。「なわこれ」ではなく「じょうこれ」です。このコーナーは安定した人気があります。縄文人のファッションセンスに、現代人は惹（ひ）きつけられるのでしょうか。今回は着数を増やしての営業でしたが、行列ができてしまうほどの人気がありました。

勾玉作りの隣では前回、黒曜石（こくようせき）を使った矢じり作りが人気になったのですが、今回は矢じり作りにプラスして、より高度なテクニックを駆使する石器作りの実演を見学していただくこと

験まつり 其の二

これって、そうやって作るの？　すご～い！

になりました。実演は石器作りのスペシャリストにお願いしたのですが、黒曜石の大きな塊から石器が徐々に形作られていくその工程を見学された方々は、きっと不思議な感覚に囚われたかもしれませんね。

石器と言えば、磨製石斧で木を切る体験コーナー。石で木を切ることができるのか、大多数の方々が半信半疑で挑戦されていたようですが、いかがでしたでしょうか。

特に今回は柄付きの磨製石斧３本を新調、加えて、切るための木が少し柔らかかったこともあり、磨製石斧の切れ味を十分に堪能していただけたのではないでしょうか。

縄文人は大変だったんだね。

縄文ワクワク体験まつりの特徴は、一日の中でいろんな体験ができる事ですが、小さなお客様にはややむずかしいコーナーもあるようです。

そのため前回は、磨製石斧で木を切る体験コーナーの隣に縄文時代の狩りを再現した「輪投げ」コーナーを設けて楽しんでいただきました。今回は、獲物の大きさと数に変化をつけて大幅にバージョンアップを図りました。

今年はさらに、縄文人が主食にしたとされているドングリを利用して、新たに「ドングリアート」のコーナーを復元住居Ｃ棟の近くに開設しました。ドングリに思い思いのお絵描きで楽しんでいただけたら、という訳です。おかげさまで、小さなお子さんを連れた親子連れには人気も上々、結構な賑わいでした。

今年も各種の体験コーナーと同時開催したスタンプラリー。ただ、今回はちょっと変化をプラス。

輪投げでイノシシ捕まえられるかな？

今年度の年間展示で展示してある銅鐸（レプリカ）を象ったシートを使い、銅鐸に描かれた４種類の図柄のスタンプを集める、というスタイルにしました。

そして、景品も火起こしマークのオリジナル金太郎飴に加え勾玉を図柄にした新バージョンを用意。さらには、あっという間に足らなくなってしまった前回の経験から、それぞれの種類を２個づつにした計４個入りを 1,500 セット作りました。

火おこしマークも好評だったのですが、勾玉の図柄は「とてもかわいい」と、さらに好評をいただきました。デザインを担当した職員はうれしかったでしょうね。

約 1,700 人のもの人たちが思い思いに楽しんだ２日間だったと思います。前回同様、スタッフは昼食も摂れないほどの忙しさの中で、形振り構わずがんばってくれました。それもこれも、参加していただいた多くの皆様方の、「楽しかった」という声とともに頂戴したあの笑顔に元気づけられて、何とか無事に終了する事ができました。

参加者の皆々様、ならびにスタッフの皆様、本当にありがとうございました。また来年も開催が決まっています。ご期待ください。

（並木）

ドングリアート、新緑の中での芸術。

クルミ

胡桃

（山胡桃）

分類：クルミ目クルミ科
クルミ属オニグルミ
生態：北海道～本州・
四国、九州に分布
特徴：落葉高木。雌雄同株

遺跡庭園「縄文の村」では、縄文時代にも生えていた50種類以上の樹木のほか、多くの野草に出会うことができます。これらの植物と縄文人とのかかわりについて、ご紹介していきたいと思います。

遺跡庭園縄文の村にオニグルミの木が生えていることに気づかれた方は多いと思います。

このオニグルミ、多摩ニュータウンで発掘調査された縄文時代の住居の炉址から、焼けた殻が発見されていたり、縄文人たちの食料になっていたことが分かっています。

オニグルミの木を良く見ると、庭園ではちょうど今の時期くらいから実が生り始めていて、楕円形の緑色の実がブドウの房のように生っています。そして秋になると、地面にたくさん落ちて来るのです。縄文食体験などでは縄文クッキーの中に入れたりして、遺跡庭園縄文の村の秋の味覚の一つとしてあげられる木の実です。身近なところでは、クルミパンとかナッツの盛り合わせに入っていたり、私たちにとっても馴染み深い木の実ですが、一般的に言われている「クルミ」は色々な種類や呼び名があったり、どういう風に実がなるのか、など意外と知られていないのです。

普段、私たちが食べているクルミは外来種で、ペルシャグルミや、カシグルミと呼ばれているものです。これらは輸入されているクルミで、殻が柔らかく、実（正式には「胚」）が多いクルミです。

日本国内でもシナノグルミという殻が柔らかく実が多いクルミが栽培されていて、道の駅などでお土産に売っているのを見たことがあるという方もおられるかも知れませんね。

シナノグルミは大正初年アメリカより入った米国種フランケットとテウチグルミとの雑種と言われ、主として長野県農事試験場において改良されたものや長野県東信地方で生まれた軟殻グルミで、テウチグルミとペルシャグルミの自然交雑から育ったものともいわれています。

上：この状態で木に生っています。
下：クルミは果肉の中で育ちます。

遺跡庭園縄文の村に生えているクルミは、オニグルミとサワグルミという二種類です。これらのクルミは日本に自生する野生のクルミで、殻が非常に厚くて硬く、ちょっとやそっとでは割ることが出来ません。当センターのワクワク体験祭りで、磨石と台石を使ってクルミ割り体験を行いましたが、意外と強く叩かないと割れないと思った方もいるでしょう。皆さんがご存知のクルミよりも殻が厚く、しかも実が少なくて食べにくいのです。ですから商品として売られることもほとんどありません。

けれど、このオニグルミとサワグルミ、他のクルミより中身が凝縮されているせいか、味が濃厚で風味がとても良いです。

今の季節は、木にぶら下がって栄養分を蓄えている時期です。

もしよろしかったら、夏の暑い最中ですが、そんなオニグルミの実の健気な姿を見にいらっしゃいませんか。

そして、秋になったら庭園内に落ちているクルミを拾って、その味を堪能してみてはいかがでしょう。

（鈴木）

多摩ニュータウンNo.457遺跡は、乞田川上流域右岸の独立台地上に位置する遺跡で、多摩センター駅の南西側約450mの多摩市鶴牧に所在します。

これは今から30年以上前の昭和56年の発掘調査のお話です。私にとっては東京都埋蔵文化財センターに入所して初めての発掘調査でもあり、以後の調査に対する姿勢の原点となる程、いろいろなことを体験し、考えさせられた現場でした。遺跡の調査自体は昭和55年から行われていて、最初の頃は学生アルバイトに間違えられたり、時にはベテラン作業員の指導を受けながら、忙しく毎日を送っていました。個性的な先輩職員たちとの邂逅、その情熱に引きずられ、多くを学ばせていただきました。

今でも夢に出てくる時がありますが、当時は写真撮影をするために鉄製の足場を組み上げるのも仕事のひとつでした。高いところのあまり得意でない私も、まさに命がけで足場を組み立てていました。鉄は重く、高さは5m以上、落ちれば大怪我は必然。気持ちを合わせないと鉄製の足場は組み上がりません。何度、足場と一緒に落下する自分を想像したでしょう。

30年以上前は埋蔵文化財調査の安全基準も構築途上で、地下式横穴を天井部を残したまま掘ったり、井戸を3m以上も直掘りしたりと、まさに今は昔の物語です。

皆さんは複合遺跡と言う言葉をご存知でしょうか？　複合遺跡とは2つ以上の時期に渡る遺跡のことで、このNo.457遺跡の場合には、旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古代、中世、近世と多時期にわたり、人間の生活の痕跡が残されています。特に本遺跡では、縄文時代の集落や狩場として、そして中世の居館の跡として、空間利用がなされていました。縄文時代では、前期の住居跡が4軒検出されましたが、内3軒が近接して見つかりました。住居跡内の遺物は、全て平面図に記録し、レベルを計測し、何故そこにあるのか等の解明を目指して調査に望みました。他にも竪穴状遺構1基、炉穴7基、焼土跡3基、集石4基、陥し穴土坑105基等が見つかっています。また遺物も縄文時代草創期～中期まで幅広く出ています。出土した縄文土器は1万点以上を数え、特に早期、前期の土器には接合の結果、完形品になった土器も多く、注目されます。石器の中には草創期の有舌尖頭器もありました。

中世では、溝で区画された段切り・削平面内から、数多くの掘立柱建物跡群や柱穴列、井戸、地下式横穴、溝、墓壙群、土坑、道路状遺構などが見つかりました（写真右）。地下式横穴には天井部の残るものもあり、墓壙の人骨の遺存状態も良好でした。中世の居館跡として、全面が利用されていました。年代的には15世紀後半から16世紀代が中心です。新編武蔵風土記稿から、小田原北条家の家人、小宮山（永島）八兵衛の屋敷跡と言われています。その他、古代の住居跡も1軒発見されており、様々な時代の様々なニーズがあったことを知る事ができました。

No.457遺跡の発掘調査報告書は、東京都埋蔵文化財センター調査報告第35集に収められています。

（金持）

1/964

多摩ﾆｭｰﾀｳﾝ地域では、964ヶ所もの遺跡が確認されています。その中から調査担当者の記憶に深く残る遺跡について、リレー方式で振り返っていきます。

＃7　多摩ﾆｭｰﾀｳﾝNo.457遺跡

左：写真撮影用足場（参考）

右：縄文時代前期の住居跡

No.457全景（北西から）　中央奥は工事中の小田急線

石器の「ツボ」　Vol. 10

細石刃（その１）

旧石器時代と縄文時代の石器の観察のツボを紹介する連載の第 10 回。今回は、細石刃です。

旧石器時代は現在よりも寒く、そのため植物質の食料資源はあまり豊富ではありませんでした。そこで、動物を獲る狩猟が盛んで、狩猟具が発達していました。

すでに紹介したナイフ形石器や尖頭器が、狩猟具の代表例ですが、それ以外に細石刃という石器があります。細石刃とは、両縁が平行で、長さ 3cm 前後の小型の鋭い刃をもつ石器です。写真は長野県南牧村矢出川遺跡出土のもので細石刃の代表例です。

図２のように、ナイフ形石器や尖頭器と同様に、木などの柄の先にはめ込んで、狩猟用の槍として使用しました。しかし、ナイフ形石器や尖頭器が柄に直接はめ込んだのとは異なり、数点の細石刃を木や動物の骨の柄に溝を掘りはめ込んでいました。

替え刃のように用いたので、例えはめ込んだ内の１点が破損しても、それだけ取り替えればよかったのです。また、このように使い勝手に優れていただけではなく、作る上でも優れた石器でした。一般的に石器を製作する際には多くの石くずが生じて、一つの原石から作ることができる石器はわずかです。しかし、細石刃はナイフ形石器や尖頭器と比べて一つの原石から多くの石器を作ることができます。きわめて効率的な石器だということができます。

また、槍全体を軽量化することによって投げ槍としての命中率を高める効果も期待されたとも考えられており、あらゆる点で進歩的だったようです。

それもそのはず。ナイフ形石器や尖頭器よりも新しい、旧石器時代の末期に現れる石器で、北アジアで発達した技術が約２万年前に本州に到達し、尖頭器と入れ替わって発達したものと考えられています。

図１は、東京都埋蔵文化財センターが発掘した八王子市の多摩ニュータウン No.213 遺跡で出土した細石刃と細石刃核（細石刃を製作した元の石材）です。東京都内ではなぜか細石刃の出土例はあまり多くありません。貴重な出土例の一つと言えましょう。（つづく）

細石刃の「ツボ」：細石刃は槍先に用いた石器ですが、旧石器時代末期に出現した効率的な方法で使われました。（伊藤）

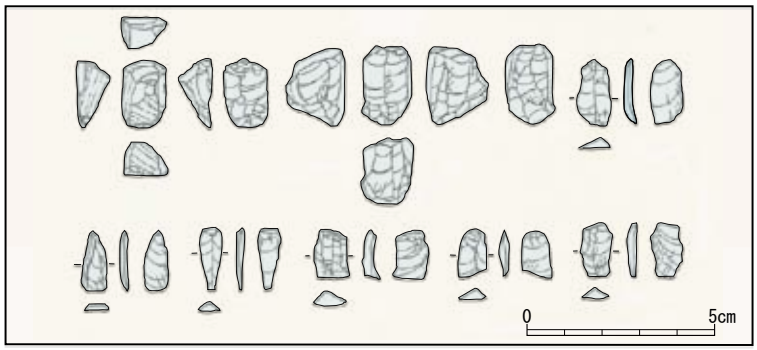


図１　多摩ニュータウン No.213 遺跡出土の細石刃（右上と下段）と細石刃核（左上２つ）（東京都埋蔵文化財センター　2000『東京都埋蔵文化財センター調査報告第 85 集　多摩ニュータウン遺跡　』より）

写真　長野県矢出川遺跡出土の細石刃（提供：堤　隆氏　堤　隆 2004『シリーズ「遺跡に学ぶ」2009　氷河期を生き抜いた狩人　矢出川遺跡』新泉社より）

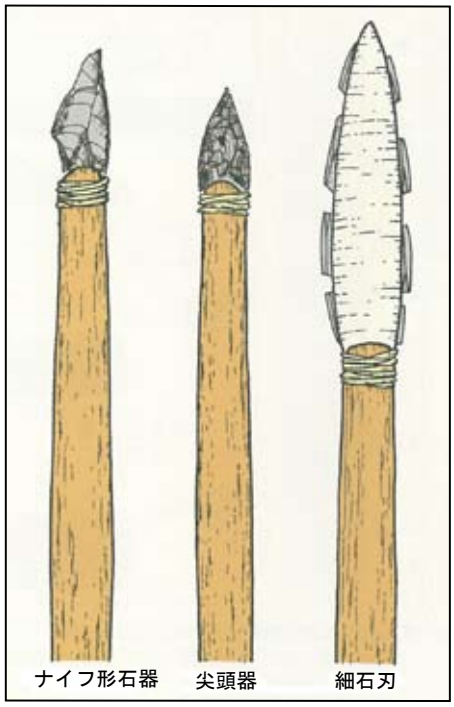


図２　石器の装着法（提供：同左）

収蔵庫から

有舌尖頭器　その１

「縄文時代の始まりはいつ頃からか」という事が最近話題になっている。研究者によっては、15,000年前頃からとする説や13,000年前頃とする説、9,000年前頃とする説などがあり論議を呼んでいる。縄文時代をどのように定義付けるかによって変わってくるのだが、この先、どのように落ち着くかは判らない。いずれにしても、縄文時代の始まりの時期を草創期と呼んでいる事には、誰も異論はないと思う。

その草創期だけに出現する石器がある。有舌尖頭器という名前が付けられている。上部先端が尖った石器ということで「尖頭器」、そして下部に舌のような突起が作られており、舌部を有するという意味から「有舌」、この二つを組み合わせた名称である。

この石器、世界の民俗事例を拠り所にして、槍の仲間とされ、その中でも投槍と呼ばれるものに分類されている。通常の槍は手に持って突くための道具であるが、投槍は人の手で、或いは投槍器というものを使って遠くへ投げる道具である。投槍器を使った場合、人の手だけで投げるより、射程距離も命中度も大幅に向上すると言われている。ただ残念ながら、わが国では発掘調査によって投槍器が発見された事例はなく、民族事例のみによって投槍とされているのが現状である。この有舌尖頭器は、投槍器を使用する投槍の先端に装着する石器である。ただこの石器は、この後に続く縄文時代早期には引き継がれていないのである。つまり、日本において、投槍器を使用する投槍の文化は草創期のみで終わってしまった、と考えられているのである。　（並木）

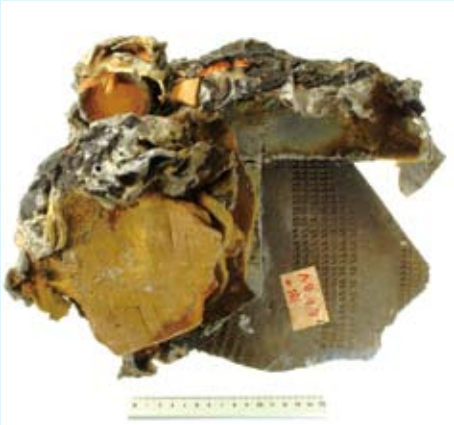
多摩ニュータウン遺跡群から発見された代表的な有舌尖頭器

― 火災被災出土品の修復 その５ ―

先般の東日本大震災の災禍は、多くの文化財にも及びました。改めて、文化財に対する保存科学の必要性を感じている近頃です。78号以来、久しぶりの掲載となる今回は、被災出土品修復のうち、塊資料についてお話しようと思います。

被災直後、多くの資料は、融解したコンテナの間に巻き込まれて塊状になっていました。個別の作業を進める上で、まず、この塊の中から出土品を取り出す作業が必要となります。しかし、塊の大きさや付着物の状況は、個々によって大きく異なります。中には、付着物の隙間をバールでこじ開けるだけで取り出せるものもありますが、付着物が大きい場合など、電動鋸やグラインダー・チェーン・ソーなどの動力工具を用いて切断しなければならないものもあります。出土品と付着物が複雑に錯綜している場合は、出土品を傷つけないよう慎重に作業を進めなければなりません。最も厄介なのは、融けたプラスチックが出土品の周囲に厚く付着している場合です。この場合は、やはりヒーティング・ガン等を用いて、根気良く周囲のプラスチックを融かしながら取り除いていく他はありませんが、作業の安全を考えると、これは局所排気装置内で行うことが望ましく、まず、塊を装置内に持ち込める大きさに分解しなければなりません。どの部分を、どの手法で、どの程度まで解体するか。状況を判断しながらの難しい対応が求められます。そのため、解体に要する時間も塊によって差が大きく、三十分程度で可能なものもあれば、３日以上掛けて解体しなければならないものもあります。

（長佐古）



塊資料の一例

これからの行事をご案内

9月10日（土）第1回文化財講演会
演題：「謎の青銅器ー銅鐸ー」
講師：比田井　克仁（中野区歴史民俗資料館）

24・25日（土･日）縄文土器作り教室④製作（2日間の連続参加）

10月15日（土）縄文食体験①　16日（日）縄文食体験②
（両日とも 9:30 ～ 13:00）

22日（土）縄文土器作り教室④野焼き

26日（水）「縄文の村」自然観察会②

29日（土）縄文アクセサリー作り教室⑦（午前の部のみ開催）

11月12日（土）第2回文化財講演会
演題：「関東地方における弥生農耕社会の成立」
講師：石川　日出志　（明治大学）

23日（祝）古代の布作り教室③（午前の部のみ開催）

26日（土）縄文アクセサリー作り教室⑧（午前の部のみ開催）

※詳しくは、センターホームページまたはお電話にて広報企画係まで

今号の表紙
春から夏にかけて、縄文の村で見かけられた花や蝶などの写真を素材に、平成２３年度博物館実習生（淺羽さん、川口さん、平林さん）が企画・レイアウトし作製しました。

「たまのよこやま」の由来　万葉集巻二十 之 四四一七 の 防人となった夫の旅立ちに備えて、山野で馬に草を食べさせていたところ、馬は逃げてしまった。やむなく徒歩で多摩丘陵を越えることになってしまった夫を見送る妻の嘆きを詠った
「赤駒を　山野に放し　捕りかにて　多摩の横山　徒歩ゆか遣らむ」（宇治部黒女）　を由来としています。

たまのよこやま 85　2011年6月30日発行
東京都埋蔵文化財センター　〒206-0033 多摩市落合 1-14-2　TEL 042-373-5296　http://www.tef.or.jp/maibun/